

大乘経典における慈悲と憐愍

渡辺 章悟

インド思想の根底に「信愛」と「憐れみ」の思想が見られるのはよく知られている。たとえば、吟遊詩人アールワール (Alvars) によるバクティ (信愛) 運動では、信者による神への信愛バクティと、神による信者への恩恵アヌカンパーが、相互に作用することで救済が成立するとされる。この信愛の共有という共感・共苦の原理は、仏教の慈悲 (karuṇā) やアヌカンパー (憐れみ anukampā) の作用とも良く対応する。ヴィシュヌ神やブッダは恩寵者、憐愍者であるが、語源としては共感者という意味も有している。特に大乘仏教に見られる慈悲や憐れみには、苦を共にするという「共感と共苦の思想」が明確に現れているし、その根底には一切のものへの平等な心を基盤とする精神が流れている。本稿では、この大乘経典に見られる慈悲と憐愍について検討することにより、「共感と共苦」という原理が、他者とともにある現代の共生思想に連なる概念であることを提示したい。

1. 慈悲の定義 (抜苦与楽)

慈悲という語は、慈と悲という二つの合成語である。まず、この語から分析してみたい。

(1) 慈 (maitrī 慈しみく mitra 友)

他者に利益や安楽を与える (与楽) いくつしみを意味する。サンスクリットの用法としては、mahā-maitrī-「大なる慈しみ」、あるいは sarvasattva-maitrī-vihāra 「一切衆生に慈しみを持って暮らす」などがその代表である。maitrī はパーリ語では mettā となる。

(2) 悲 (karuṇā)。

√kṛ 由来する形容詞あるいは名詞で、原意は「悲嘆」「呻き」である。他者の苦に同情し、これを抜済しようとする (抜苦) 思いやりを表す。ただし、karuṇā のみで慈悲と漢訳されることが多い。この語は女性名詞で compassion、pity などと英訳される。

このように、maitrī は「慈しみ」や「友愛」であり、karuṇā は「悲しみ」や「憐れみ」であり、もともとは別の用語であったが、次第に両者が意味を補い合って、抜苦・与楽という義を備えるようになった。また、慈悲の原語としては、カルナー (karuṇā) やクリパー (krpā) を想定したものが多く。

一般的には、「慈」はサンスクリット語のマイトリー maitrī (友情) にあたり、深い慈しみの心をさし、「悲」はカルナー karuṇā (同情) にあたり、深い憐みの心をさす。つまり、生きとし生ける者に幸福を与える (与楽) のが慈であり、不幸を抜き去る (抜苦) のが悲であると説明する⁽¹⁾。

また、大乘仏教の根本精神が慈悲にあることは、多くの経論に述べられている。たとえば、『大日経』住心品では、「菩提心を因と為し、大悲を根と為し、方便を究竟と為す」⁽²⁾ と説き、悟りを求めてやまない心を因縁となし、限りなき大悲を基本的条件とし、巧みな手だてをもって究極の行為となすことを強調する。

また、『華嚴経』ではしばしば大悲 (mahākaruṇā) を重視し、「大悲を先導とすること」(mahākaruṇāpūrvaṅgama [-tā, or -tva])⁽³⁾、「大悲を先とする」(mahākaruṇāpūrvakah)⁽⁴⁾、「大悲に先行されること」(mahākaruṇāpuraskrtatva)⁽⁵⁾ が強調される。

さらに、『大智度論』では、「慈悲は仏道の根本である、なぜかと言うと、衆生がもろもろの苦しみに悩むのを見て、菩薩は大慈悲を生じ、このような苦しみから救い出し、その後発心して、最高の悟り、阿耨多羅三藐三菩提

を求める」⁽⁶⁾ というように、慈悲を悟りの根本に置くのである。さらに続けて、「慈は、衆生を愛念するに名付け、常に安穩と樂事とを求め、以てこれを饒益す。悲は、衆生を愍念するに名付け、五道の中の種種の身の苦と心の苦を受く」⁽⁷⁾ とある。この教説は悲の働きを衆生への憐愍とし、それを身と心の共苦とする点で重要である。

2. 三種の慈悲

通常のマイトリー（慈）やカルナー（悲）ではなく、大慈、大悲、大慈悲というときは、仏や菩薩の慈悲を表す。その場合、仏の慈悲は、生ける者の苦しみを自己の苦しみとするので「同体大悲」といい、上を覆いかぶせるものがない広大なものであるので「無蓋大悲」ともいう。ただし、この見解はインド仏教の経論には見られず、東アジアで発達した教義であるが、その趣旨は多くの経論に共通する。以下は主な大乘経論におけるこのような慈悲の教説を取り上げ、その中に流れる基本思想を指摘しておきたい。

まず、慈悲の特徴を示す普遍性と平等性に着目したい。たとえば『大智度論』では、慈悲を対象に即して、三種に区分する⁽⁸⁾。すなわち、(1) 生きとし生ける者に対して起こすもの（衆生縁）、(2) すべての存在は実体がないと悟り、執着を離れて起こすもの（法縁）、(3) なんらの対象なくして起こすもの（無縁）の三種があるとし、このうち無縁の慈悲が無条件の絶対平等の慈悲であり、空の悟りに裏づけられた最上のもので、ただ仏にのみあるという。

このうち三つの慈悲に共通するのは平等性である。まず第一の「衆生縁の慈悲」とは、一切衆生を縁とし、生きとし生けるものを一視同仁に扱うという意味での平等性。第二の「法縁の慈悲」は、一切法空（一切存在するものは固定的実体をもたない、無自性空なるもの）の理を縁として施すという真理性における平等性、第三の「無縁の慈悲」は、対象に差別を設けず、空という体験の境地から、自然に生まれるところの平等性である。

この「無縁の慈悲」は、一切の差別を見ない、無碍の大慈であり、無縁の大悲であるとする。それは自身のためになすものでもなく、他人のためにもなすものでもないという。この徹底した無縁の大悲には自他の差別がない。このような自他平等の思想が、仏教思想における慈悲の基盤にあることが指摘できる。

3. 慈悲とその訳語の語源分析

慈悲のサンスクリット原語にも重要な意義がある。まず、慈 (maitrī) が「他者に利益や安樂を与える」で、「悲」(カルナー karuṇā) は「憐れみ」「悲嘆」「呻き」である。

M. Monier-Williams の『梵英辞典』⁽⁹⁾ によれば、この語 karuṇā は√kr (5、9類の動詞で、傷つける、殺すの意味を持つ) に由来し、形容詞 karuṇa であれば、mournful ; miserable ; lamenting などの意味を持つ。女性名詞としては、pity ; compassion ; mercy などと英訳される。

R.L. Turner の『印欧語比較辞典』(2809、2811)⁽¹⁰⁾ によれば、karuṇa- (adj. mournful)、karuṇā (n. pity) は、√kr (to call) に由来する可能性があり、プラークリットで kaluṇa- (unhappy)、kuluṇa- (sympathy, mercy)、あるいは kāruṇa (grieved, plaintive cry) や、kāruṇā-, kāruṇika-, kāruṇya- の類語性を指示している。これらの言葉は、他者の苦に同情してこれを抜済しようとすることに他ならない。

これらは英語で compassion や sympathy と訳されるが、compassion (慈悲) は、ラテン語に由来し、「一緒に」(共) を意味する com と、「苦痛」を意味する -passion に分解できる。特に後者は“the Passion”という用法に見られるように、キリストの受難や殉教を意味する。これはもともと古い教会が使っていたラテン語でパスイ (passi)、つまり「受難」にかかわる言葉である。一般的に英語の Passion は、情熱、熱情、激情、情念などを意味するが、古語で殉教、受苦、悲哀を意味するのはこのラテン語を受容しているからである⁽¹¹⁾。

したがって compassion (憐愍) とは、「苦しみを共にする」(共苦) という意味の原語にふさわしい訳語なのである。

この語 sympathy も sym- と -pathy に分解できる。ただし、こちらはギリシア語に由来する。まず前分 sym- は、ギリシア語系の接頭辞で、「共に」「同時に」「類似」などの意をもつ syn- が m, p の前では sym- となるという規

則に従ったものである。後分の -pathy は、「苦しみ」を意味するギリシャ語パテイア (patheia : suffering) に由来する⁽¹²⁾。したがって、この結合語も「共に苦しむこと、共苦」という原義である。これらの語感に共通する思想が普遍的な共生の理念に結びついているのである。

4. アヌカンパー anukampā の用例とその意義

これらに続いて重要なのはアヌカンパー (anukampā) である。「アヌ」anu- という接頭語は「なにかにしたがって」を意味し、「カンパー」kampā とは「震える」という意味の動詞√kamp (1 類) から作られた名詞である。したがって、「アヌカンパー」は、「なにかにしたがって」、あるいは「なにかとともに」「震える」ということになる。

また、anukampin は「哀愍を持つ者」という意味であり、しばしば hita- ~、あるいは lokahita- ~ という結合語を造り、「世間を利益する」ことを、共感を持って実践する者という意味となる。これらの語は、初期仏典から典型的なストックフレーズの中に見られる。

- (1) 『スッタニパータ』によれば、仏伝に関連する部分の中で、アシタ仙が仏陀の降誕を占った偈頌として以下のように述べられる。

「この王子は最高の正覚を体得するだろう。彼は最上の清浄 (= 涅槃) を見る者で、多くの人々を利益し、憐愍し (bahujana-hitānukampī)、法輪を転ずるでしょう。彼の清浄な行いは、広く流通するでしょう。」(Sn 693)

このように、利益 (hita) と憐愍 (anukampin) が並記されるが、この両語は大乗經典においても一組となって頻出するものであり、その初期的用例として注目される。

- (2) 『長部』『大般涅槃經』

「比丘たちよ、私がよく知り、教示したという、それらをあなたたちはよく学び、たとえば、この梵行が長時にわたり、久しくとどまり、それが多くの人々の利益のために、多くの人々の安樂のために、世間を憐れみのために、天・人の目的のために、利益のために、安樂のためになるように、親近すべきで、修習すべきで、多く行われるべきであるという、その諸法とは何なのでしょうか？

すなわち四念処、四正勤、四神足、五根、五力、七覚支、聖八支道です」。

Katame ca te, bhikkhave, dhammā mayā abhiññā desitā, ye vo sādhuṃ uggahetvā āsevitaṃ bahuṃkātabbā, yathayidaṃ brahmacariyaṃ addhaniyaṃ assa ciraṃthitikaṃ, tadassa bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussānaṃ. seyyathidaṃ, cattāro satipaṭṭhānā cattāro sammappadhānā cattāro iddhipādā pañca balāni satta bojjhaṅgā ariyo atthaṅgiko maggo. (DN II . 100 [119-120])

ここに見られるように (1) の法輪として説かれる内容が、(2) では三十七菩提分法となっている。この語句は定型的に用いられ、多くの大乗經典にも継承される。

- (3) 『八千頌般若』(Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā P. P.*, BST no.4, Darbhanga, 1960, p.37)

カウシカよ、正しい悟りを得た尊敬すべき如来たちが世間に生じないとき、カウシカよ、その時、偉大なる菩薩たちは、以前に聞いた般若波羅蜜の自然の結果として、巧みな手立てを備えるようになるのである。カウシカよ、彼らも生きとし生けるものを憐れむもの (共感するもの) であり、憐れみ (共感) のためにこの世にやってきて、十善業道を世間に榮えさせる。

yadāpi kauśika tathāgatā arhantaḥ samyaksaṃbuddhā loke notpadyante, tadāpi kauśika bodhisattvā mahāsattvāḥ

pūrvaśrutena prajñāpāramitāniṣyandena ye upāyakaśalyasamanvāgatā bhavanti, te 'pi kauśika sattvānām anukampakāḥ anukampām upādāya imaṃ lokam āgamy daśa kuśalān karmapathān loke prabhāvayanti (catvāri dhyānāni bodhyaṅgaviprayuktāni loke prabhāvayanti, catvāry apramāṇāni bodhyaṅgaviprayuktāni loke prabhāvayanti /)

この引用で説かれるように、憐愍する菩薩たちが説く内容は、大乘で重視された十善業道となっており、大乘経典における教えの再編が見られるところである。

(4) 『八千頌般若』 (Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā P. P.*, BST no.4, Darbhanga, 1960, p.109)

世尊が仰せになった。「なぜなら、スプーティよ、彼ら [さとりが近い] 偉大なる菩薩たちは、多くの人々の福利のため、多くの人々の幸福のため、世間への憐れみ (共感) のために修行しているのである。[彼らは] 人々の大いなる利益のため、福利のため、幸福のために、さらに神々や人間を憐れむ (共感する) ものとして、憐れみ (共感) のために、無上にして完全なさとりを現等覚したいと思っている。彼らは無上にして完全なさとりを現等覚して、無上なる教えを説きたいと思っている。

bhagavān āha / tathā hi te subhūte bodhisattvā mahāsattvā bahujana-hitāya pratipannā bahujana-sukhāya lokānukampāyai / mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyānām cānukampakā anukampām upādāyānuttarām samyaksambodhim abhisamboddu-kāmāḥ anuttarām samyaksambodhim abhisambudhyānuttarām dharmam deśayitukāmāḥ //

この引用文では菩薩たちの修行の目的が、多くの人々の利益や幸福のため、世間への憐愍のためであり、無上正等正覚の教えも、そのためにそのために説かれるのである。

(5) 『八千頌般若』 (Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā P. P.*, BST no.4, Darbhanga, 1960, p.125)

また、供養されるべき、完全な悟りを得た如来たちは、その時、その他の世界にとどまり、耐え、生きておられる。[かれらは] 多くの人々の利益と、多くの人々の幸福と、多くの生きもの為に、利益と幸福のために、神々と人間たちと、一切の生きとし生けるものを憐れむものとして、憐れみのために、かれらはまたこの智慧の完成に敬意を払い、熱意を持っているのである。

ye 'pi te 'nyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā etarhi tiṣṭhanti dhriyante yāpayanti bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya, hitāya sukhāya devānām ca manuṣyānām ca, sarvasattvānām cānukampakā anukampām upādāya, te 'pi sarve imāṃ prajñāpāramitāṃ samanvāharanti, autsukyam āpadyante. (p.125)

(6) 『善勇猛般若経』 (R. Hikata ed., *Suvikrāntavikrāminpariprcchā P. P.*, Fukuoka, 1958, p.4, II.7-13)

「世尊は偉大な菩薩である善勇猛に答えられた。

“まことによろしい、善勇猛よ。あなたが正しい悟りを得た尊敬すべき如来 [である私] に、智慧の完成について問うたのは結構なことです。それはあなたが、偉大な菩薩たちのため (arthāya), あるいはまた多くの生きものの利益を願い、安楽を願うからであろう。また 世間を憐れんで、神々や人間の人々のためにを想い、彼らの利益と安楽を願うからでもであろう。また、現在・未来の偉大な菩薩たちの光明になろうと、あなたが欲するからでもあろう” yathā 'pi nāma tvam bahujanahitāya pratipanno bahujanasukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānām ca manuṣyānām ca etarhy anāgatānām ca bodhisattvānām mahāsattvānām ālokaṃ kartukāma” iti)。

(5) (6) とともに定型句で如来と菩薩の説法と心構えを述べているが、[善勇猛] 菩薩が依用し、さらに他者に対して説く内容は「智慧の完成」であり、般若経特有の教説となっている。

(7) 『法華経』 (Kern-Nanjio ed., *Saddharmapuṇḍarīkasūtra*, BB10, Osnabrück, 1970, p.41, ll.10-12)

また、シャーリプトラよ、未來世においても、量り知れず、数え切れない十方の世界に、正しい悟りを得た尊敬されるべき如来たちがおられて、多くの人々の幸福のため、多くの人々の安楽のため、世間を憐れんで、神々や人間など人々の利益、幸福、安楽のために、〔この世に〕あらわれるであろう。

ye 'pi te śāriputrānāgate 'dhvani bhaviṣyanti daśasu dikṣv aprameyeṣv asaṃkhyeyeṣu lokadhātuṣu tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai mahato janakāyasyārthāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca /

『法華経』においてもこの定型的語句が頻出することが判る。また、多くの写本の功德文にもこの文句が記されていることから、経典の書写を重視する大乘の信仰にも大きな影響を持っていたことが判る。

5. まとめ

以上、大乘経典における慈悲と憐愍の用例を検討してきた。慈悲についてまとめておけば、初期の仏教では「慈」(maitrī) が多用され、次第に「悲」(karuṇā) と併称されるようになり、さらにこの二つの語に「喜」(muditā 他者の幸福を喜ぶ) と「捨」(upekṣā 心の平静、平等心) が付加されて、「四無量心」あるいは「四梵住」といわれた。この実践は、修行者のもつべき基本的徳目として重視されていた。

大乘仏教においては、慈悲は利他行と結びつけられ、菩薩の誓願とされるようになり、さとりに向かうための根本原因であり、仏教の実践の基盤ともなった。それは『華嚴経』や『大日経』の例で指摘したように、大乘経典一般の思潮にもなっていくのである。

また、慈悲と類似した憐愍は、「如来や菩薩たちが人々の利益と安楽のため、世間を憐れんでこの世に現れ、説法する」という文脈で用いられていた。菩薩たちは、衆生や世間を憐れむ(共感する)もの(anukampakā)であり、その世間には神々や人間、阿修羅を含む生きとし生けるものすべてが含まれる。そして、この憐愍によって、無上なる正しい悟りにさえも到達できるとされていた。

菩薩は、世間や人類の利益と幸福と憐愍(共感)のために、この世界に出で立ち、憐愍(共感)によって衆生を見る。その働きが、大乘仏教の理想として描かれているのである。

注

- 1 しかし、『大般若波羅蜜多經』では、「慈悲に安住し、樂を与え、苦を抜く。このように一切の有情を愍念し、平等にして苦を離れ、樂を得せんと欲する」(No.220.7. 般若部, Vol. 71041b12-25)とあり、『大般涅槃經』では「もろもろの衆生の為に不利益を除く、是を大慈と名づけ、衆生に無量の利樂を与えんと欲す、これを大悲と名づく」(T374.12.454a8)とある。このように、慈と悲は厳密に区別されず、ほとんど同じ心情を表わし、マイत्रीまたはカルナーという原語だけで「慈悲」と漢訳されることも多い。
- 2 『大日経』 T848.18. 1b29-c1: 菩提心爲因。悲爲根本。方便爲究竟。
- 3 『十地品』 Dbh. p.16, l.5; 71, l.2; p.96, l.15, 『入法界品』 Gv. p.6, l.12, p.389, l.19.
- 4 『十地品』 Dbh., p.116, l.17, p.143, l.12.
- 5 『十地品』 Dbh., p.18, l.6.
- 6 『大智度論』 T1509, Vol.25, 256c16ff.
- 7 『大智度論』 (T1509.25.0208c9-11) 「四無量心者。慈悲喜捨。慈名愛念衆生。常求安隱樂事以饒益之。悲名愍念衆生。受五道中種種身苦心苦。」云々。このようにしばしば四無量心の中に組み入れられて説明される。
- 8 T1509, vol.25, 209a7, 257b26, 417b21.
- 9 Monier Monier-Williams, *Sanskrit English Dictionary*, Oxford, 1899.
- 10 R.L. Turner, *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*, Oxford University Press, 1966.
- 11 the Passion で、ゲツセマネ (Gethsemane) の園および十字架上の<キリストの受難>,あるいはキリスト受難曲 (= Passion music) のジャンルで、バッハ (Bach) 作曲の「マタイ受難曲」(the St. Matthew Passion) のように使われる。また、時計草 (Passion Flower, *Passiflora*, flos passionis) なども、この花卉の形状が十字架のイエスに似ていることからこ

の名が付けられたのである。

- 12 -pathy は一般的な英語としては、連結詞として、「～の感情、苦しみ、～病、～療法」などを意味する。たとえば、医学用語としては、同毒療法を意味する homeopathy や、その反意語の逆症療法 allopathy がその代表的例である。しかし、これらも本来の「苦しみ」という意味から派生したものである。